公益社団法人 日本山岳会関西支部

# 関西支部報

2014年11月
No. 157

http://www.jackansai.com

## 阿部和行前支部長追悼号

### 阿部和行さんを偲ぶ

金井健二

元気な阿部さんに最後に会ったのは2011年の支部新年会だった。しばらく体調がすぐれないとは聞いていたが、久しぶりに元気な姿を見せ、大いに話がはずんだ。そんな阿部さんから枚方のグッドタイムリビングに入所したとの通知をもらったのは12年の夏ごろだった。一度お見舞いをかねて表敬訪問をと思いながら日が過ぎ、漸く昨年4月末に宗實慶子さんとお訪ねした。再会した車椅子の阿部さんには、あの精悍な表情がすっかり消えていた。精気のなくなった阿部さんとの面会は二人にとってはいささか悲しい再会だった。訃報に接したのは半年後のことである。

阿部さんとの出会いは昭和39年の春、私が支部委員として支部運営のお手伝いをするようになったときである。当時の関西支部は、支部長が水野祥太郎さんの時代で、支部委員会には大学山岳部の大OB、例えば今西壽雄(京大)、岸田権二(同志社)、田淵邦彦(関大)、大橋秀一郎(大阪市大)、水野政博(関学)の諸氏に、中堅どころの住吉仙也(阪大)、平林克敏(同志社)のお二人と、更に大学山岳部大OBの意を受けた若手OBが委員を務めていた。実務面は、社会人山岳会系のクライマーである梶本徳次郎さんや阿部さんが担っていて、前記若手OBがその下働きをしている状況だった。当時の関西支部は海外遠征萌芽期の有力基盤であったと同時に、岳人のサロン的雰囲気も色濃く残していたように思う。支部が靭公園のスポーツマンクラブに移ってからは支部委員会も阪大病院の水野研究室で行われたりした。阿部さんは、岩登り教本なども著し、紫岳会を率いる気鋭のクライマーであると同時に、大阪通産局でJIS規格の検査官もされているとお聞きした。誠に几帳面に地味な支部業務をこなされていた。1970年のJACエベレスト遠征を境に、関西支部もサロン的雰囲気が徐々に薄れ、今西支部長になって、支部委員の若返りが図られ、金井良碩君(現副支部長)等第二世代の委員が阿部さんの下で実務を担当するようになり、支部活動が活発化するようになった。

在りし日の阿部和行氏

阿部さんが大阪通産局を辞め、田淵製作所に入社されたのは年表によれば1967年だそうである。従って私の感覚では、大阪通産局の阿部さんという印象は薄く、田淵製作所の阿部さんである。当時の田淵製作所の社長は関大OBで支部委員も務められた２代目の田淵邦彦さんだった。

気鋭のクライマーであった阿部さんがヒマラヤに夢を馳せていたのは当然である。それ故、阿部さんがJACに

目次

阿部和行前支部長を偲んで
金井健二……1
薬師義美……3
大口瑛司……4
箕浦靖夫……5
藤本　勇……6
宗實慶子……6
金井良碩……7
篠崎　仁……8
斧田一陽……9
水谷　透……9
山内幸子……10
吉見　孝……18
小野葉子……19
北壁の中で　阿部和行……11
阿部和行氏略歴……20
編集後記……20
スケッチ　阿部和行画　3点……付

入会したのも諏訪多さんや岸田さんから「JACに入ったらヒマラヤに行けるで」と誘われたからだそうである。ただ、ヒマラヤ遠征の萌芽期には、遠征登山をするにも「大義名分」が必要だった。通産局勤務の阿部さんがヒマラヤ行きの大義名分を見出し兼ねていたであろうことは想像に難くない。阿部さんの夢は漸く1971年になって実現した。大阪府岳連の西北ネパール、カンジロバ遠征隊長としてである。「ヒマラヤに行かせてあげることが、阿部さんに田淵製作所へ来てもらうときの約束やったからね」とは大阪空港に見送りに行ったとき、私が聞いた田淵邦彦さんの述懐である。念願を果たされた阿部さんは、田淵邦彦さんの期待に十二分に応えられ、1983年には田淵製作所常務取締役に就任された。時間に追われる大手の広告会社勤務に倦んで、零細でも自由のきく自営業になっていた私は、田淵邦彦さんが健在のころから阿部さんを通じて何回かPR関係の仕事を発注してもらったので、田淵製作所にはかなり足しげくお邪魔した。余談になるが私は大阪市の南限は大和川と思っていたが、田淵製作所所在地の瓜破南というところが大阪市では例外的な大和川の南側の松原市に隣接した平野区の飛び地であることを知った。

私が阿部さんに誘われて山やスキーに行くようになったのは前述の今西支部長になって支部活動が活発になったころからである。月例山行で奥美濃の荘川へは幾度も行ったし、氷ノ山の神戸大学の煙たい山小屋で楽しい一夜を過ごしたこともあった。阿部さんに誘われて行った山スキーでは、AJCSSというクライマー仲間のスキー天狗の集まりで、八甲田山に久保三朗さんと共に青森行きの寝台急行「日本海」で出かけたことが印象深い。集まっていたのは小山貢さん等錚々たるクライマーばかりだったが、さすがスキー天狗の皆さんだけあって八甲田山の谷を鮮やかに滑りまくっていた。そして、阿部さんはこのグループの「総裁」であった。数年後、やなばスキー場でのこのグループの小集会に阿部さんに誘われて

二人で出かけた。中央道はまだ伊北までしか開通していなかった。集会前に遠見スキー場で一滑りしようということになり、ゴンドラで上がった。滑り始めたら阿部さんが「新雪へ行こう」とロープをくぐったので追走した。三分の一ほど滑ったところでけたたましいホイッスルが鳴り響き、スピーカーでゲレンデに戻るよう命ぜられた。息子のような若い監視員に捕まり大目玉を食らった。素直に謝ったが勘弁してもらえず揚句ゲレンデ入口の管理事務所に連行され、更に延々とお説教を聞かされ、始末書に署名捺印(拇印)してようやく釈放されるという破目になり、とんだ一滑りになってしまった。「君が生まれる前は、遠見尾根はどこを滑ってもよかったんだがねえと云いたかった」と二人でぼやいたのも懐かしい。翌日のやなばスキー場では東京から三上智津子さんも来ていてポールを立てた回転コースを滑らされ、タイムも計測された。三上、阿部の順で私は最下位、散々な２日ながら思い出深い阿部さんとのスキー行の一つである。

阿部さんからドナウ川自転車旅行の紀行冊子をもらったのは、94年の秋頃だったと記憶する。この冊子をもらった有志で集まって、凌霜クラブで「ドナウ川紀行の話を聞く会」を企画していたさなかに阪神大震災がおきた。阪急の西宮北口以西は交通が途絶、さながら敗戦間際の空襲罹災地を思い起こさせるような景観を呈していた。このような状況下にあって、JAC会員関係の被災状況確認とお見舞いに自転車の阿部さんが活躍したのもついこの間のようである。ただ大震災の渦中で「ドナウ川紀行」の企画は残念ながらお流れになってしまった。

そのころは98年の冬季オリンピックの長野開催が決まり、バブル経済末期の日本では、スキーブームは頂点に達していた。全国のスキー場では設備投資が相次ぎ、宿泊費もリフト代も高騰していた。一方、海外行き航空運賃は円高の影響もあり格安航空券が出回り始めていた。94、95年のGWにチロルへのスキー行を試みた私は、支部報に「チロルの氷河スキー場」という紹介文を書いた。チロルの谷のスケールの大きい氷河スキー場の魅力と、日本と比べて割安な宿泊費とリフト代などを強調した。掲載後まもなく阿部さんから、支部の行事としてチロル・スキーを企画しないかと提案された。私が行ったところはインスブルック周辺のエッツタール、シュトバイタール、ツイラタールの三つの谷の氷河スキー場だけだったので、比較する意味もあって、翌96年の春、サン＆サンの“スキーツアーザルツブルグ8日”というツアーに阿部さん、阪下悦子さん等と出かけ、ダハシュタイン、バドガシュタイン、ザールバッハ、ツエルアムゼーなどの

スキー場を回った。この視察ツアーの一因は、阿部さんがドナウ川の自転車旅行の際に集めた資料の中から、ツエルアムゼーとカプルンの魅力的なパンフももらっていたので、比較検討したかった次第だった。その結果、インスブルックを中心とした「チロル・スキー」が支部の行事として97年にスタートした。この行事は準備不足であったにもかかわらず、晴天にも恵まれて参加者から予想以上の好評を得ることができ、口コミの好評も伝わって、以後、延々10年にもわたる支部の年中行事になった。正に阿部さんの提言で始まったチロル・スキーだった。一方、その間にも阿部さんの自転車行脚はドナウ川からライン川に転じて続けられ、2002年には「ライン川自転車の旅」という立派な紀行冊子を発行するなど、阿部さんは、登山、スキーから、パラグライダー、自転車などとアウトドアでもまことに広いジャンルにわたって万年青年ぶりを発揮していた。

私と阿部さんとのお付き合いは、阿部さんの多彩なアウトドア活動のごく一部ではあったが、お蔭でそのごく一部をいまだに細々ながら実行できているのは、阿部さんの背中を無意識に追い続けてきたような気がしている。

## 阿部さんの想い出

**薬師義美（京都・滋賀支部）**

阿部和行さんの知己を得たのはいつだったのか、確かな記録が手元にないし、記憶も曖昧である。多分、1960年代のはじめ、諏訪多栄蔵さんを介してであっただろうか。

1961年から通称「AJCSS（All Japan Climbers Ski Symposion 全日本クライマーズ・スキー・シンポジウム）」という催しがあった。関東や中京、関西の社会人団体の山屋が中心になり、毎年2月、八方尾根に集まり、足前を競うスキー大会を開いていた。同時に情報交換と親睦を目的としていた。総裁に諏訪多さんをいただき、阿部さんはそのサブ的な存在で、私もはじめの何回か参加させてもらった。これは50回をもって幕を閉じたようだが、諏訪多さんの亡きあとは阿部さんが総裁を引き継いでいた。

このAJCSSが始まった頃から、関西の山屋の集まりが活発になった。それは「RISS」といい、中心は阿部さんであった。岩、氷、雪の勉強会という略語だったと思う。主に情報交換の場であったが、私のメモには63年から月に1回のペース、大阪は梅田界隈での集会が記録してある。65年8月にネパールへ出かけるまで、このRISSには欠かさずに出席し、また翌年に帰ってからも、例会には出ていたようだ。

そのうちに、ネパール・ヒマラヤには良い地図がないから、カムカルテを自分たちで編集しようということになった。そして阿部さんを中心に、吉永定雄さんらと大阪で地形図研究グループを立ち上げる。その成果は雑誌「岳人」の第230号（1967年1月）から縮尺25万分の1のスケルトン・マップとなって1年間、分担して作図、連載することになった。

ネパールは8葉、カラコルム4葉である。これが10年後に諏訪多さんらを加えて、吉沢一郎監修『世界山岳地図集成　ヒマラヤ編』（学習研究社　1977年）の大冊へと昇華していった。

当初、阿部さんは大阪通産局勤務の技術屋さんで、性格的にもきっちりとし、提出された資料やレポートは緻密であり、理科系のそれであった。そして『岩登り技術』（東京中日新聞出版局　1964年）をまとめ、7年後には『新岩登り技術』（東京新聞出版局　1971年）の改訂版を出した。いかにも阿部さんらしい本になっている。

阿部さんとはまた、日本ネパール協会関西支部でも一緒に仕事をすることになった。78年11月、第7回ネパール研究学会を中尾佐助支部長のもと、神戸の関西地区大学セミナーハウスで開いたとき、阿部さんには会場設営をお願いした。さらに85年から大橋秀一郎さんが第二代支部長に就任された時、阿部さんにも委員として参画してもらった。そして88年から「関西ネパールロビー」という集会が年に何回か開かれ、現在まででその回数が66回を数えているが、出欠の葉書が〈いの一番〉に届くのはいつも阿部さんであった。第50回（2005年12月3日）の区切りのよい記念すべき時には、阿部さんに「ネパールの水口―蛇口の源流」という話を、スライドを交えてや

ってもらった。これは71年にツォカルポ・カンに遠征した時、諏訪多さんから与え(教え)られた研究テーマだったという。このときは水道関係の会社に勤めていたから、「ヒティマンガル」の調査は、まずは自然なテーマであったろうか。

それが2010年6月の支部総会にご出席のあと、ロビーへの出席の返事があっても、無断欠席。さらには出欠の返事もなし。阿部さんらしくもないと受付で言っていた。その前には〈フガフガ〉の会話があったので、「一体どうしたの」と聞いたら「〈コケタ〉ので前歯を折った」という話。「阿部さんらしくないね、お互いトシだし、気をつけましょう」といって別れた。阿部さんからは10才若い私であり、阿部さんは大きな兄貴分であった。

私が日本山岳会に入会したのは1962年、関西支部である。紹介者は諏訪多さんと岸田権二さん。86年に京都支部ができた時に移籍し、関西支部は会友となった。そして阿部さんが支部長の間はと、しばらく籍を置いていた。しかし、山行をともにしたことはなく、もっぱら街中でのお付き合いであった。数年前には蔵書や地図類の処分について相談を受けたこともあった。その時は二、三の古書店と図書館の紹介をしておいた。

諏訪多さんが大阪から横浜へ転居される時、多数の文献、蔵書を処分された。それらを阿部さん、吉永さんと私の三人で、かなりの時間をかけて整理した。今は懐かしい思い出だが、それらは立山山麓の芦峅寺、立山博物館に収まっている。もし関西に然るべき施設があれば、遠方まで運ぶ必要もなかっただろうし、阿部さんの資料も一緒になれば……、と複雑な心情である。

阿部さん、長い間、いろいろありがとうございました。どうぞ安らかに……。合掌

## 阿部さんの想いで

**大口瑛司(東海支部)**

私が阿部さんを知ったのはAJCSS(All Japan Climbers Ski Symposion 名前は仰々しいがスキーを仲立ちにしたクライマーの親睦会)の最初の頃からだったと思います。もう50年も前のことですから諏訪多栄蔵さん角口想蔵さん等、関西の重鎮もお元気でご一緒でした。

諏訪多栄蔵さんを総裁に担ぎ上げて行っていたAJCSSも第10回大会を区切りに、初期の目的も達成されたとして解散することが話し合われました。しかし折角各地のクライマーと親しくなったことだし、ここで止めては勿体ないというのが大勢で、同窓会的に続けようということで総裁に白羽の矢が立ったのが阿部さんでした。

阿部さんも元気なうちは楽しく参加されていましたが、いつの頃からか「誰か総裁を代ってくれ」が口癖になってきました。年齢的にも大阪から八方尾根まで車で来るのは大変だったでしょう。終盤はもうスキーは持参してみえなかったようです。さりとて阿部さん以外に代わりを押す気配もなく「AJCSSはもう止めよう」になってきました。でも50回大会(阿部さんになって40年)で止めるからと、無理やり総裁をお願いしてきました。全くの私的な集まりであり、総裁不参加でも何ら問題ないのに、きちんと参加される姿を見て誰もが阿部さんの誠実な人柄に感じ入った次第です。

AJCSSの番外編でオートルートへ出かけた時、この年はお天気が悪くスタートのシャモニーで足止めを食って、日程の関係で途中のアローラからオートルートに入りました。アローラからはコロン氷河を登り、岩稜の上に建つベルトール小屋に向かう途中、グレッシャー・パトロール・レースのトレーニング中の連中が急な氷河を股制動で直滑る姿を見て度肝を抜かれました。彼らのストックには黒いスポンジが付いていました。翌年、チロルへ連れて行っていただいた折、インスブルックのスポーツ店で黒いスポンジの巻かれたストックを見つけました。だが1セットしかなく、阿部さんに先を越されて悔しい思いをしました。

どこでウィルスを拾ったのだろう。私は朝ベルトールの小屋を出発するとき少し風邪気味のようでした。マッターホルン北壁の下を通ってツェルマットに到着したときには熱が有るように感じました。阿部さんが言うには「ヨーロッパの風邪は強烈でよくない」とのことでした。

翌日、ザース・フェーまで足を延ばす者、氷河スキーに行く者と別れ、私達(阿部さん・箕浦さん)はザース・アルマーゲルへ出かけました。それは私のピッケルが「アルマーゲル」なのでその故郷を見たかったのです。

外国語がダメな私にはムリだと諦めていましたが、親切にもドイツ語の出来る阿部さんが付き合ってくれることになりました。風邪気味のところを列車とバスを乗り継いで着いた終点のザース・アルマーゲルは、集落にホテルが点在する山村で閑散としていました。

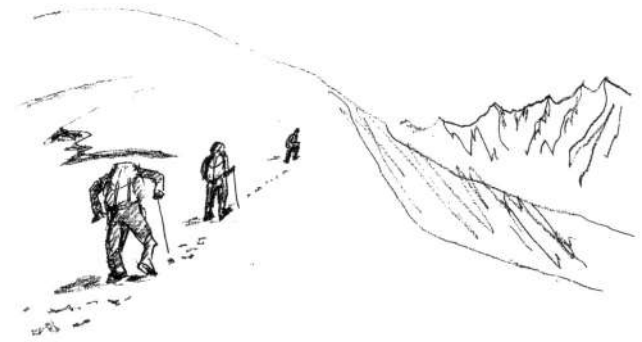
案内所でも食堂でも阿部さんに「アルマーゲル」のピッケルを造った鍛冶屋を知らないか聞いてもらいましたが誰も知る人はいませんでした。戦前の古い物ですから当然かもしれません。目的は達することが出来ませんでしたが、ザース・アルマーゲルというスイスの原風景の様な田舎に行くことが出来て、思いがけず感動の旅になりました。

次の日は風邪がひどくなるばかりでした。阿部さんがツェルマットの診療所の場所を調べ、そのうえ持参の『日本語－ドイツ語会話集』まで持たせてくれました。早速診療所に行くと医者は喉を見たきり、処方箋を書いて診察は5分と掛かりませんでした(診察、薬代〆て2万円)。阿部さんの言う通り、ヨーロッパの風邪は処方箋の薬(アスピリン)を飲んだ位では治るはずもなく、翌日は帰国のため我家でするように水分を取って布団をかぶり、汗をかいて熱を下げることにしました。これが功を奏したのか薬で良くなったのか、いずれにしても翌日はスッキリして帰国することが出来ました。

阿部さんにはチロルの山スキーに連れて行ってもらったり、森の勉強会でご一緒したりと「AJCSS」関連や「森の勉強会」の付き合いしかありませんが折に触れて親しくして頂き、また大変お世話になりました。

温厚で誠実な阿部さんにもうお会いすることが出来ないとは寂しい限りです。本当に有難うございました。

合掌



## 阿部和行氏を偲んで

箕浦靖夫(東海支部)

平成25年11月11日、日本山岳会の長老で永年関西支部長を務められた阿部和行さんが亡くなられた。

阿部さんと初めてお会いしたのは、今を遡ること52年前の昭和37年2月17日、白馬八方の岳望荘でした。故加藤幸彦、高田光政両氏のスキー談義が嵩じたのをきっかけに、両雄の優劣対決をと故鈴木重彦、橋村一豊氏が呼びかけて東京・大阪・名古屋等から40名ほどが集まった時だった。大阪から諏訪多、角口大先輩とともに阿部さんも参加されていた。阿部さんのことは、ご著書を読んでいたのでお名前は存じ上げていたものの、直接お会いできたので大変興奮したことを未だに憶えています。

その後、この集まりがAJCSSとして50年も続くことになります。会を取り仕切る総裁役を諏訪多栄蔵氏、深田久彌氏から引き継いで長年務めていただき、公私に亘り大変お世話とご指導をいただきました。

海外へも二度ほどご一緒させていただき、先述の故加藤幸彦氏がカナダ・ケローナに在住の折、阿部さんをはじめ10人ほどで出かけて楽しみました。その後、ヨーロッパアルプスのオートルートにもご一緒しました。ゲレンデでは私より遅い阿部さんに先を越され、後を追うのに苦労しました。

多才な阿部さんからは、この他パラグライダーを勧められ加賀・鶴来の方へ数回出かけ、風に乗って楽しんでおられた姿が少し前のように思えます。

またある時、自転車を始めようとお誘いを受けた。一時はその気も無きにしも非ずでしたが、“俺はヨーロッパアルプスを源流とした北へのライン川、南へのドナウ川を海まで走ってみたい”と、いとも簡単に聞かされた時、私の意気は消沈してしまいました。

その後、奥様同行でドナウ川を下られたと聞き、たまげ驚きました。あの容姿からして何処にエネルギーがと疑いを持ったものです。

亡くなられる前年、施設に移られたことを耳にしたのでお訪ねしました。奥様に押された車いすで出迎えを受けたので「みっとも無いですね」と申し上げたら、照れ笑いをされたのが印象的でした。帰り際、「また来ます」と挨拶した折り、“ウン、また来てや”とおっしゃったのが最期の言葉になってしまったことが今もって大変残念で堪りません。今頃は、先に逝かれた山の先輩の方々と懇談されていることでしょう。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 阿部さんと支部の蔵書

**藤本　勇**

私がJAC関西支部の委員をしていたころの支部の蔵書は、年一回の虫干しと称して図書の著者と話し合って蔵書を見る機会があった。当時は株式会社今西組の事務所ビル・最上階の一角に蔵書が本棚に保管されていた。

一体、どんな図書がどれだけあるのか、全貌がわからず図書目録を完成させることが急務であった。以前の委員の方はワープロ専用機で途中まで作られていたが、あまりのデータの多さに匙を投げられていた。

1999年の夏に図書整理のプロジェクトチームを結成した。延べ18日、延べ員数81名で蔵書を整理し、藤本がデータを家に持ち帰り、パソコンの表計算ソフトを使って蔵書目録を完成させた。プロジェクトチームのメンバーは藤本(チーフ)、中谷、柏木、宗實慶、宗實二、新井の諸氏。

| | 和書 | 洋書 | 計 |
|---|---|---|---|
| 関西支部 | 620 | 262 | 882 |
| 二木文庫 | 714 | 63 | 777 |
| 今西文庫 | 880 | 233 | 1,113 |
| 梶本文庫 | 587 | 40 | 627 |
| 阿部文庫 | 218 | 76 | 294 |
| スポーツマンクラブ | 537 | 17 | 554 |
| 合　　計 | 3,556 | 691 | 4,247 |

これらの蔵書は年に一二度の来訪者に閲覧されているだけで、ほとんど死蔵といってもいいくらいだった。永年のルームも大阪府山岳連盟との共同で市内の今里で開設できたが、支部の蔵書をすべて移動することは出来なかった。今後の図書の有効活用を考えて図書館への寄託等をと考え、私の母校大阪市立大学の児玉学長を阿部さんと一緒に訪れてお願いしたが、山岳図書は学術本でなく大学図書館として保管出来ないとの返事であった。

大阪市役所の裏側に大阪府立中之島図書館がある。その図書館の蔵書は東大阪市の荒本に新設された中央図書館に大阪市関係の蔵書以外が移された。山岳図書にめぼしい図書もなく、私たちが作った支部蔵書目録を見せると図書館側は重複本以外受け入れてくれる約束を取り交わした。すぐに支部委員会で経過を報告し蔵書の移管の日程の検討に入ったが､阿部さんから「待った」がでた。

本部の意向は「関西支部の蔵書は山岳会の財産なので公営図書館への移管とはいえ、ダメである」との横槍が入った。まるで梯子を途中で外された感じがして、阿部さんとの仲が急速に冷えてしまって委員会への出席も見合わせるようになり､関西支部を退会するようになった。しかし支部の蔵書について紆余曲折はあったが、今では大阪府立中央図書館に保管されて、山の本の好きな人には自由に閲覧できるようになった。これらの発案者は阿部さんであった。それをサポートしたのは私であった。

阿部さんとの山行は2000年の夏に、大阪山の会の人達と一緒に西北ネパールを旅した。いまは天国でゆっくり山登りを楽しまれていることだろう。

合掌

## 忘れられないこと

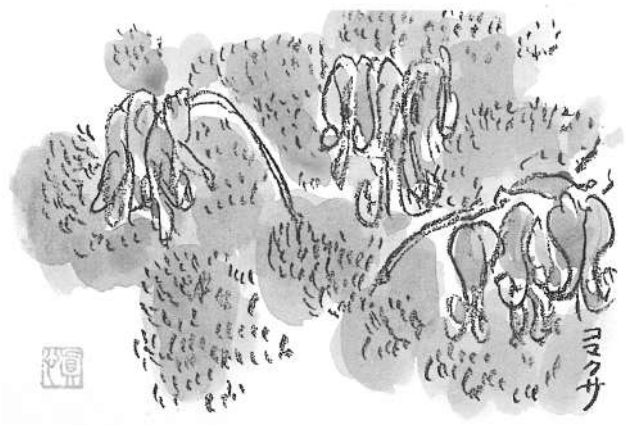
**宗實慶子**

今西壽雄関西支部長が日本山岳会会長に就任され、その後を継がれた阿部和行さんと19年間、いろいろな事を経験させていただきました。

関西支部創立50周年記念で所管の各府県（奈良・和歌山・滋賀・大阪・京都・兵庫・香川・岡山・徳島・広島・愛媛・高知）の最高峰巡りで四国の剣山に登ったときです。笹の葉に足をとられたのを見て、「なんや、その歩き方」と叱られました。今でも忘れる事ができません。

2004年の秋、スケッチの会“鹿島槍を描く”で阿部、金井良、小寺さんのお供をしました。台風一過の中央道を走り、大谷原の神戸大学翔羊山荘に入りました。大町の蕎麦屋で“こむそう茸入りのぶっかけ”､日本酒“真澄”の冷やに相好をくずされました。

ご冥福を祈るばかりです。



## 阿部和行さん

**金井良碩**

阿部さんは、前任の今西壽雄さんが日本山岳会会長に就任されたのを機に、1986年に関西支部長となられました。それまでも、委員長のような立場で支部委員会に関わっておられたので、すんなりと支部長交代がなされたものと感じていますが、その頃はまだ、戦中戦後の混乱期の関西支部を支えた方々が数多くご健在だったので、支部長候補はほかにもおられたのでしょうが、今西さんの信頼が特に篤く、自らの後継者と指名されたものと思っています。その後、2005年まで19年の長きにわたって関西支部長を勤められ、その年に開催された、日本山岳会創立100周年、関西支部設立70周年の記念行事を迎えるのを花道に、重廣恒夫・現支部長にバトンタッチされました。

阿部さんと私とは20歳ほど歳が離れているのですが、私にとっては兄貴分のような存在で、結構馬が合いました。阿部さんも私が若くて使い勝手が良かったのか、何かにつけ用事を託してこられました。私が関西支部に出入りし出したのは、今から遥か40年以上前のことですが、そのころの支部は、大阪市西区の大阪スポーツマンクラブの一室の事務机一つでした。会合はその机の周りを取り囲んで話し合い、発送などの事務作業はその机の上でやっていました。高名な海外登山経験者の錚々たる顔ぶれが、黙々と事務作業に汗を流す姿を見て20代半ばの私はいたく感動したものです。阿部さんもそんな中におられました。阿部さんもまた、鹿島槍北壁や奥鐘山西壁などにおける輝かしい初登攀記録の持ち主のクライマーでした。あるとき、猪名川上流の屏風岩の料亭で、牡丹鍋の忘年会という洒落た催しがありましたが、阿部さんはリュックに三つ道具を入れてきて、一人で岩登りを楽しむという茶目っ気もありました。

関西支部では、集会や山行行事に加えて、1994年からスケッチの会が始まっています。毎月のようにスケッチ山行が、近くの六甲山を中心に京都北山、柳生、室生辺りで開催され、ときには作品展なども催されましたが、阿部さんはほぼ皆勤で参加されていました。日帰りでは物足りないというので、安曇野、奥美濃、熊野古道辺りまで２、３泊のスケッチ旅行も実施されました。参加者の絵の流儀はそれぞれでしたが、山は景色がすぐ変わるので、スケッチ10分、彩色10分程度で、一つの作品は30分以内に描き上げました。阿部さんの作品は鉛筆かサインペンで軽くスケッチして、淡い独特の配色で仕上げる透明水彩画で、メルヘンチックな雰囲気を醸し出すものでした。

阿部さんとの山行で忘れられないのは、1999年の4月の、チロル・エッツタールでのスキー山行です。支部の仲間5人でフェントからフェルナクトヒュッテに入って、ビルトシュピッツェ(3768m)を目指しましたが、残念ながらフルヒトコーゲル（3497m）止まりになりました。4泊のヒュッテ生活でしたが、好天が1日だけだったので、代わりにヒュッテでの滞在時間が長くなり、ヨーロッパ各地からの登山者と交流できました。ドイツ語教育で有名な六甲学院出身の阿部さんは、片言のドイツ語が話せたので会話は盛り上がり、また、沈殿の時間を利用して何枚かのスケッチを描き上げていたので、これらの品表会でさらに一段と盛り上がり、実に楽しい日々を過ごしました。なお、後日談ながら私を除くほかのメンバーは、2年後にお隣のピッタールに入って、阿部さんとともにビルトシュピッツェの登頂を果たしました。

阿部さんは、登山やスキーのほか自転車やパラグライダーをもこなす、いわばアウトドアなら何でもやるという、精力的な人でした。特に自転車は、1995年から10年ほどかけて、ドナウ、ラインのヨーロッパを貫流する大河を源流から河口までをたどる、自転車の旅を単独で挙行されました。これらの川は多くの国々を通過するので、英語やドイツ語さえも通じない地域も多く、コミュニケーションを図るのに大変苦労されたようですが、持ち前のパイオニア・スピリッツでこれら難題を解決して、見事に完走を果たされました。そればかりか、阿部さんの優れたところは、これらの旅行記すべてを、数冊の本にまとめられたことです。Windows 95が発売されたばかりのころですが、パソコンを駆使しての労作です。ご自分自身の文章と写真、それにスケッチの何枚かを加えた

お手製の出版物で、阿部さんは、これらの本を「自費出版」ではなく「自己出版」と称されました。

阿部さんを語る上で欠かせないのは、1990年6月に、皇太子殿下のお供で大峰山脈の山上ヶ岳と八経ヶ岳に登られたことです。梅雨の季節の2泊3日の山行でしたが、脚もアルコールもお強い殿下のお供は、緊張の中でも結構楽しかったようで、下山後は話が弾んだのか、切符も持たずに京都までご一緒されたのです。ただ、お供のことは今西支部長以外には誰にも知らされていなかったし、阿部さんもまた、お供の前も後もこのことを吹聴されることはなかったので、阿部さんが支部報に報告記事を掲載されるまでは、関西支部員は全く誰も知らなかったのです。その後の、殿下ご出席の日本山岳会年次晩餐会では、殿下は必ず阿部さんにお声をかけられたと聞き及んでいますが、阿部さんのお人柄が窺える一場面だと思っています。

私の山での偉大な師であり、兄貴分であった阿部さんのご冥福をお祈りします。

（「山岳」第百九年<2014.8.15刊>より転載）

## 阿部さんの想い出

**篠﨑 仁（千葉支部）**

机上に阿部和行さんの著書が一冊載っている。『新岩登り技術』（東京新聞出版局　1971）、表紙を繰ると達筆な署名が現れる。署名をお願いした時「こんなことをすると古本屋で売れなくなるぞ」といいながら、したためてくれた。本書は岩登りの技術書であるが、その根底には深い思索とクライマーとしての阿部さんの哲学がある。

岩場から落ちた瞬間を表現したこんな文章がある。落ちながら、“ヘッセのペーター・カーメンチントが雲を愛し、雲の動きをあかず眺めたように、私はその漠々とした怠惰に身をゆだねていたのであった。” そして、その直後に岩に打ちつけられたという。何という感性なのであろうか……。

また岩登りについては、こうも言っている。“人間はおろかにも自然の摂理に反抗することに喜びを見いだし、その反抗が失敗しないために金をかけることをいとわない。キリストも日蓮も反抗者として世の中の迫害を受けたが、クライマーも同じように迫害を受けるに至って、この道もいずれ神や仏に通じることになるのであろう。” ややシニカルなそしてユーモラスな表現の中に、阿部さんの岩登り哲学をうかがい知ることができる。技術書として活用する機会はあまり無かったが、阿部さんの顔を思い浮かべながら楽しんで読んだ。

阿部さんとは同じ枚方市に住んでいたことから、支部委員会の帰りによく車に乗せていただいた。小一時間の車中での会話は談論風発、山の話もさることながら文学、音楽そして後部座席に放り込んであった雑誌「プレイボーイ」のことなど、とどまることを知らなかった。お嬢さんと出かけたサーフィンの話では、シャイな表情を見せた。ビジネスの話題では、一瞬きびしい言葉もあったことが印象的であった。

家族ぐるみでお付き合いいただき、妻と娘二人とともに立山山麓あわすのスキー場に連れて行っていただいたことがある。小学生と中学生の娘たちが、へたくそな父親を見放し、「阿部さん、阿部さん」とつきまとって離れなかったことを思い起こしている。

転勤で東京に戻り、阿部さんとお目にかかる機会が少なくなった。わたしはJAC理事在任中に千葉支部の設立を担当することになり、そのまま支部長をやる羽目になった。阿部名支部長には到底及ぶべくも無いが、さりながら折に触れ阿部さんの顔を思い浮かべつつ支部運営に携わった。年次晩餐会でお目にかかりまことに適切なアドバイスをいただいたことが忘れられない。

## 阿部和行さんとの想い出

斧田一陽

**自然保護のこと**

自然保護には、ずいぶんと関心を持たれていたようです。ある時、上横手さんから岩湧山南側の山林作業道が拡張され、周辺に影響が及んでいるとの話が支部委員会でありました。大阪府に情報公開を求め、その後に現地調査を考えていると一緒に行くと云われた。作業道関係の書類を閲覧し、必要なところをメモして現地に出向きました。

2003年に自然再生推進法が施行されました。阿部さんからこのことについて田村さんの話が聞きたいと要望があり、支部で自然保護集会を開きました。当時は破壊された自然の再生そのものに関心が集まっていました。

高尾の森で一緒に植樹したのも思い出の一つです。自然保護全国集会の翌日に「高尾の森づくりの会」が実施した植樹イベントに阿部さんは、平林さんとともに参加されました。ヤマザクラなど当時植えた木が育っていることでしょう。

**鹿島の小屋のこと**

1990年大阪花と緑の博覧会のスイス館には、大きな山小屋が展示されていました。閉会後は撤去されるので関心を持たれていた様子でした。ほどなくして若い頃よく通われていた鹿島槍ヶ岳の山麓に、ドイツから個人輸入して農小屋を建てられたことをお聞きしました。小さな小屋を想像して聞いていますと、ちゃんと電気もあるし、風呂もあると自慢されていました。東海支部の箕浦さんから阿部さんとの最後のスキー集会に誘われたことがありましたが、参加しておれば見せていただけたのではと今になっては残念なことです。

**阿部さんの本のこと**

ライン川の源流から自転車旅行をされた時の紀行をまとめられた本を戴きました。編集・印刷・装丁・製本を一人でされた限定本でした。全て一人でされたとのことに大変驚きました。素人のことですから装丁が一番難しかったと言われていました。たしかに読み終わる頃には、何枚かはバラバラにはなりましたが、貴重本の一冊ではあります。

ご遺族から所蔵本を関西支部に寄贈したいとのお話しがあり、二度ほどお伺いしました。山の本以外にも幅広く読書収集されていましたので、同好の方々に広く活用されることを願って知り合いの古本屋を紹介しました。

家が淀川を挟んでそんなに離れていなかったので、行事の後など何回か車でお送りしましたが、道中での自然保護の話などもう聞けなくなりました。大変残念なことです。ご冥福をお祈り申し上げます。

## 阿部さんの思い出

水谷　透

阿部さんには驚かされるようなことがいくつかあり、それが強く印象に残っている。そのエピソードをいくつかご紹介して追悼に代えさせて頂きます。

***

ご自宅へ仲人をお願いに伺ったとき、ややオレンジがかった黄色のカヌーが家の脇に置いてあった。それまで山の話しかすることがなかったので、山だけじゃなく海もかと思ったのだが、その後パラパントも始められ、陸海空とも制するつもりなのかと驚いた覚えがある。

***

阿部さんが勤めておられた会社と直接取引はないものの、私の会社とは同じ業界であった。山岳会の用があるときは自宅に連絡があるのだが、ある日の昼前に会社に電話が掛かってきたことがある。遭難騒ぎでもあったのかと驚いたが、内容は仕事に関係したことだった。「新製品のテスト中だがバルブの耐圧が低くてテストにならない」ので、耐圧の高いバルブが欲しいとのことであった。すぐに欲しいと言われ、その日の午後阿部さんの会社へ持って行ったことがある。

***

ゴールデンウィークに乗鞍岳へ出かけ、山頂からスキーで滑り降りたあと、蕎麦屋に立ち寄った。長く待たされた挙句に、大して美味しくもないざるそばがでてきて、阿部さんは「物足りん」と手をポケットに突っ込むと、なんと一味のビンを取り出し、信じられないほど一味をそばつゆに入れたのである。一味をビンで持ち歩くとは、唐辛子辛いのが苦手な私は唖然としてしまった。

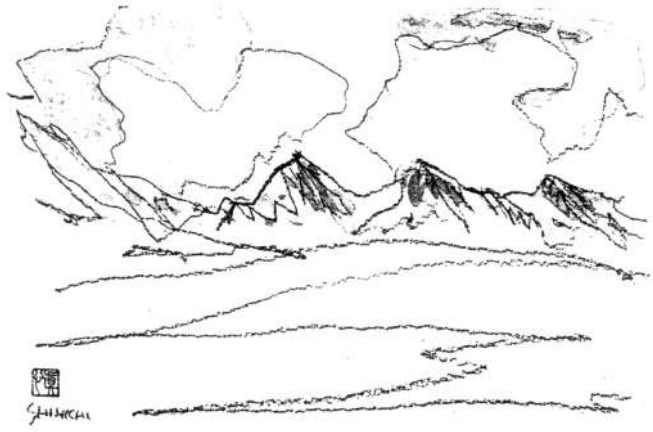
***

阿部さんとプライベートでは何度か一緒に山へ行った

ものの、関西支部の山行には参加されることは少なかった。そんななか珍しく、支部50周年事業の最高峰巡りの一つであった、四国の三嶺から剣山への縦走に参加された。人数が多かったこともあってのんびりしたペースの山行であったが、阿部さんは縦走中「つまらん」を連呼されていた。この「つまらん」は阿部さんの口癖のようで、委員会の場で聞くことはなかったが、委員会後のプライベートな場ではよく耳にした。

***

阿部さんはほとんど刺激のない天国で「つまらん」を、きっと連呼しているに違いない。私の耳には今も「つまらん」が遠くから聞こえてくるのである。



## 前阿部支部長のこと
## 怖い人から優しい人へ

**山内幸子**

山岳会にお世話になって30年余になります。会員になる前から多くの山行に参加させてもらっていました。その時から支部長であった阿部さんの印象は畏れ多い人でした。スキーや沢登りをはじめ、特に岩登りのエキスパートであり関西支部の支部長として無駄口は叩かない厳しい人で近寄りがたく、声など掛けることはできませんでした。山行ではご一緒する機会が少なく、話す機会もなかったせいでしょう。たまたまご一緒した山行で蒜山に登った時、一番後ろから歩いておられて「山岳会の会員ともあろうものがこんなにたらたらと歩いて…」というようなこと言われたのです。冗談で言われたのかもしれませんが新入りの会員にとっては厳しい言葉として受け取り怖い印象を抱いてしまいました。車に同乗させていただいたときもつまらないことを言ったら相手にされないと思い込み話しかけることなく黙っていたことを覚えています。支部合同山スキーでも技術の未熟な私は林道を滑ることが多くあまり接点がありませんでした。委員会でもつまらないことを言ったらだめだと思いこんでしまいました。

こんな印象を持った阿部さんでしたが何年か委員会の仕事でご一緒しているうちに少しずつ印象が変わってきました。阿部さんのスケッチを見せてもらった頃からでしょうか。無駄のない優しい線で描かれた絵、淡い色合いでほのぼのとさせてくれる絵を見てこんな絵を描かれるのなら本当はとても優しい人なのだと思い違いをしていたことに気付きました。それからは気楽に話しかけることができるようになりました。つまらないことばかり話しかけていたように思うのですが、いつも黙って聞いてくださり最後に肝心な一言が返ってきていました。今となっては１枚絵をもらって部屋に飾っておきたかったのにと思っています。それに阿部さんの書かれた紀行文もメルヘンチックでした。ドナウ川のサイクリングの話、皇太子殿下と一緒に大峰を歩かれた話などとても印象に残っています。

四国支部の尾野さんのお世話で「阿波踊り」に参加したとき、若い元気な女の子たちが力いっぱい踊る姿をニヤッと笑いながら嬉しそうに見られていた姿、森の勉強会で伊勢神宮の森に行って植物観察をしながら一緒に歩いたことや夜みんなでおかげ横丁を散策したこと、中部山荘に泊まってのスキーなども思い出されます。

やっと「山に誘ってください。」「一緒に山に行きましょう。」と声を掛けられるようになったら「もう、あんたらと一緒に行かれへんわ。しんどくて。」と言われるようになり、ご一緒に山を歩く機会が増えなかったことが残念です。

19年間関西支部長としてご尽力いただきありがとうございました。

安らかにお休みください。

町に繰り出す前の記念撮影（2007年8月14日）　写真提供：中島隆

# 北壁の中で

## 昭和三十八年五月一日～二日　鹿島槍北壁直接尾根中央ルンゼ側支稜

阿部和行

### 夜

フィヒテの「眠られぬ夜のために」が役にたちそうだ。明日晴れたら北壁へ出て行かねばならない義務感に、心が重くて眠り込めなかった。ここ鯨の背のACテントの中は、夕方横を流れ去ったなだれの音以来、雨の音もかすかになり、静かな域の音のみが支配している。安らかな寝息らしいものがまだ聞こえないのは、皆明日の登攀を思って寝つかれないのだらうか。

しばらく後には寝息が聞こえ出し、音の方向から誰が寝込んだなとわかる。私の隣に寝ている三好の息が、互い違いに寝ているから足の方から聞こえだした。はじめて北壁に取付くというのに簡単に眠り込める彼等がうらやましい。私も彼等のように図太くなりたいが、私の心はまだ不安定な状態のままだ。

コンチャンとはじめて雪の直接尾根へ取付く前夜も、キレット小屋で私はあまり眠れなかった。既に十年も前のことである。うとうとしている間にサポートの連中が起き出して炊事をはじめたものだから、眠い目を晴れた外気にさらしてまだほの暗いキレット沢を四人で下ったのだった。直接尾根になぜとらわれるのかわからないが、鹿島の北壁で最後まで残されたリッジが直接尾根の中央ルンゼ側支稜なのだ。岩の状態は悪い。新雪もついた。危険性の大きいこの壁を、十年もすぎた今、なぜ私は再び登りに来たのか。

登山は無償の行為であるがゆえに人びとに魅力があるのだが、私の場合はどうだろう。毎年繰返す失敗と、年々積重なる体の老化にあせって、この辺で一花咲かせようという気が多分にあったのではないだろうか。それを花と認めるかどうか人によって異なるが、充実したことをやろうとする欲望はたしかにあった。

だが明日の出発を思うと、これらの欲望が全て私の心の中から消えうせてしまっていることに気がつく。長い間親しんで来たこの山も、今は私の心より遙かに大きく、私は初心者のときの山への恐れを再び感ずるのみである。

### 朝　　靄

空に雲はなかった。出かけなければならない。躊躇する私の心に同調して、私を北壁から引もどしてくれる理由は何もなくなった。新雪の斜面を歩きながら私は考える。山へ来る前に、私はこのリッジを登るファイトを燃やしていた。是非登り切らねばならんと考えた。それが私の安全のために必要なことだと考えた。だが今、なぜ私が登らねばならぬのかに疑問を感じる。引返すなら今のうちだ。前を登って行く三好に声をかければいいのだ。登ってやるぞという声は今は小さくなって心の片隅で鳴いているにすぎない。しかし依然として私はだまって三好の跡をたどっている。心が二つに割れて肉体も心の通りには動かず、三つの動きがバラバラに私をとりかこんでいるようだ。

### クラリヨン

朝陽にまぶしく輝く新雪の斜面を登り出す。茶色いデブリも今日ばかりは白銀の塊だ。登るにつれて斜面の新雪は深くなり奥の雪渓の入口で十五センチぐらいありそうだ。私たちの肩からぶら下げたハーケンが、歩くたびに高い音をかなで、それが真青な空へとすい込まれていく。五月の朝風にひびくハーケンはクラリヨンだ。きらびやかに化粧した岩にとりかこまれて、白いアルプの上を山羊達はどこへ行くのか。

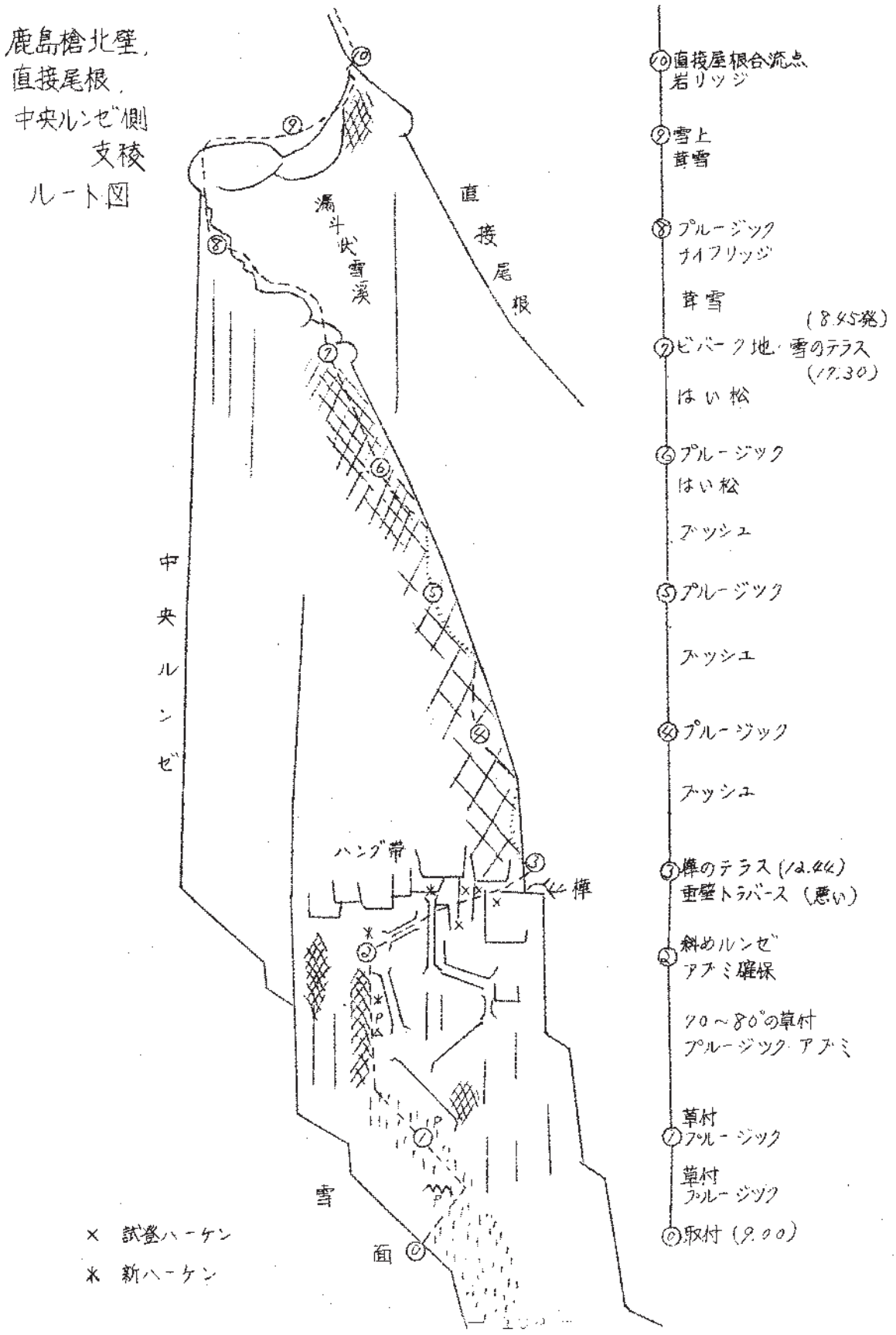
行く手にあるものを山羊達は知っているのか？

（クラリヨン＝スイス・アルプスで放牧の牛や山羊が首にさげる大きい鈴。現在はスイスでもゴングと呼んでいる。）

### 賭は為された

足もとのまぶしい新雪の斜面を見つめて登りながら、「レ・ジュー・ソン・フェ」と私はつぶやく。賭は為された。肉体的に引返すことは可能なのだが、私の心は既に直接尾根にしばられ逃げ出すことができない。そこには欲望はなく、漠然とした山への恐れに引かれて行く自分を見出すのみである。そして私の行手には直接尾根の支稜しかない。その他のリッジは私に許されてはいない。こんなことでいいのか、登攀が賭でいいのか。

一か八かという気はない。自分の技術で岩壁が登れないとも思わない。それは私の心の中の躊躇へのかけだ。賭けるものは喜びだ。


鹿島槍北壁，
直接尾根，
中央ルンゼ側
支稜
ルート図
直接尾根
漏斗状雪渓
中央ルンゼ
ハング帯
雪面
⑩直接尾根合流点
岩リッジ
⑨雪上
草雪
⑧プルージック
ナイフリッジ
草雪
(8.45発)
⑦ビバーク地・雪のテラス
(12.30)
はい松
⑥プルージック
はい松
ブッシュ
⑤プルージック
ブッシュ
④プルージック
ブッシュ
③稜のテラス(12.44)
重壁トラバース（悪い）
②斜めルンゼ
アブミ確保
70～80°の草付
プルージック・アブミ
草村
①プルージック
草村
プルージック
⓪取付(9.00)
× 試登ハーケン
＊ 新ハーケン

（レ・ジュー・ソン・フェ　モンテカルロなどの賭博場で、ルーレットをまわすときに胴元が発する合図　もう変更はできないぞと念をおす意味が含まれている）

**友　　達**

正面ルンゼへの急な雪面を、サーポー隊長の川西が先頭に登って行く。直接尾根へ取付くときに写真をとっておきたいという我々の勝手な希望のために、彼は肩から三つのカメラと露出計を下げて我々と同行したのだ。だが結果的には我々のために取付きまでの雪面にステップを作るアルバイトを受持ってくれることになった。彼は北壁を登る二パーティのために、今日北峰上までサポートに登らなければならないが、我々の希望はそれを阻害するものであることが次第にはっきりしてきた。もう彼に下りてもらおう。

主稜末端の岬付近で彼を呼止め、そこから見える範囲をカメラにおさめて彼に渡す。直接尾根の取付きまではついて行ってもらうわけにいかない。あまりに時間が遅くなりすぎる。私達は取付きで写す希望を捨て、あとから登ってきた横田と川西に帰ってもらった。

斜面を下って行く彼等の姿はすでに小さくなり、主稜へ取付く二人も登って行った。二人だけになっても私にはまだ決然としたものが生まれていないことを感じる。

**紅白の水引**

中央ルンゼのなだれ道になっている浅い雪溝を渡ってラントクルフトから草付に移る。見上げる壁は案外容易そうに思えて心が少し軽くなった。

「昼までに樺へ着いたら、今日中に抜けられるかも知れんぞ。」

明るくなった気持ちで三好に話しかけた。

ビバークなしで登りたい。ビバーク自体の苦しさはそう大きいものではないが、それに加わる精神的な、あるいは多少肉体的な苦痛を避けたいのが本心だった。

白いメインのザイルと、真紅の補助ザイルが私の手から上へと伸びていく。殆どの装備をかついだ三好はザックが重いのか草付をややぎこちなく登って行く。朝の陽を受けてゆっくりと伸びるザイルを見つめる。

二本のザイルは紅白の水引だ。紅白は喜びのしるしだが、我々には何のしるしになるだろう。

**ピッチ　②**

壁を近々と見る。遠くからではわからなかった壁の様相が見える。いくつものオーバーハング、斜めのバンド、垂直の岩溝。再び三好が登り出す。八十度にもなる草付へ真直ぐ登っていきづまってしまった。その間に壁をゆっくり眺めまわすと、カンテの方へ斜めの階段状のバンドを見つけた。その上はどうだろうか。少し壁があって浅い岩溝に入れる。その上は？　垂直にひだのある壁で上がハングしている。あいつは登れそうだ。

「三好！　おりて右へ移った方がええぞ！」

しかし彼はおりようとしない。プルージック・ザイルを出してアブミをかけ、何回もやり直した末にアイゼンをアブミに置きゆっくりとアブミに乗って右の岩へ移っていった。

緊張しているためか、このスローモーション映画を見ていても時間が気にならない。常にトップが落ちた時のことを考える。止められるだろうか。彼のザイルを放出できるように整理し、ただ途中の支点が抜けないことを念ずるだけだ。だのに不思議に不安が感じられない。壁への躊躇はすでに心から消え去ってしまって、うまくザイルを操作せねばと思うだけだ。

サイコロはすでに投げられていた。心の中から躊躇がしりぞき、喜びのための努力が私を包む。

**空　　間**

アブミに乗って私を確保する三好をまたいで前へ出た。アブミを支えているハーケンをちらっと眺めることを忘れなかったが、見ない方がよかった。我々二人を結ぶザイルは、互いに決して落ちてはならない約束のしるしと変わっていた。

「阿部さん、右のルンゼの上まで、さきに登ってくれませんか。」

私は岩の部分は三好をトップにするつもりだった。もし落ちたらという考えが頭をかすめ、不安がその後を追った。しかし彼の乗っているハーケンを見て何が云えよう。右上へ延びる浅い岩溝へ入り、アイスバイルで一つ一つ岩をたたいてたしかめて登った。どれ一つとして満足な

音を発する岩はなかった。

やがて垂直の岩溝となり、ハングが頭上に何段も張り出して水がしたたっていた。岩はどれも空ろな音をひびかせ、指先で動かしてみて動かない岩は無いといってよかった。アイゼンをそっと乗せてゆっくりと立上る。一歩ごとに決心が必要だった。

垂直のひだから向う側をのぞくと、荷宮と深見の残したアイスハーケンが岩から半分突出ているのが見えた。その下のスタンスは今にも崩れそうだ。何回ものぞいては引き下った。今度こそは踏み出そうと思いながら、どうしても決心がつかない。思い直してトラバースの基点にハーケンを打ってみたが、バイルの二振り目に黒いハーケンは音もなく空間を落ちて行った。不自由な体つきでハングの根本にハーケンを打ち、ザイルを通してみたものの、全くそれは気休めにすぎなかった。

気休めながらやっと一歩を踏み出す決心がついた。案外芯のある音を出すアイスハーケンにカラビナをかけ、崩れないのが不思議なスタンスにアイゼンをのせる。もう一つ先の岩ひだの向う側にもハーケンがある。音を確かめる時間も惜しくザイルをかけ、次のスタンスに乗りかえる。だがハーケンは引張れない。バイルであちこちの岩をたたきまわり、できるだけ高い音の岩を探し出す。体を岩に引きつけないと後へ放り出されそうだ。片手で岩をつかみ次の岩をたしかめる。グラッと動く。別の岩、やはり動く。その次の岩も動く。

「どの岩もグサグサや！」

それは三好への言葉でもあり、自分への決心のきっかけでもあった。絶望感はなく、何とかして‥‥その思いだけが心を占めていた。苔のついたテラスに這い上がり、待望の樺に坐り込んだ。

「ちょっと待ってくれ！」

三好に呼びかけて私は体と心を取りもどすことにつとめた。ふと見る樺の根元に黄色と白のポリエチ袋が残されている。これも試登の時のものに違いない。

岩ひだで曲り込んだザイルはちょっとやそっとでは動かなくなった。自分への所へたぐり寄せるのに力を使い尽くし、又休憩が必要だった。長い間アブミに坐っていた三好は脚が痛いと云いながら登り出した。やがて垂直のトラバース。

アイスハーケンの下のスタンスに乗って少したったとき、彼の足元から岩が崩れて黒い岩が見えた。不思議に彼は爪先でまだ壁にとまっていた。次のひだを廻って一歩近づこうとした彼の体は、上半身が少し前へ曲がって空中に乗出していた。落ちずにすんだかと思った瞬間、そのままの姿勢で彼の体は音もなく下へ流れて行った。

緊張していたためか、あるいは本当にそうだったのか、軽い衝撃を肩に感じただけでザイルは手の中に止まっていた。少しは重量感があるが軽すぎる。切れてはいないだろうが‥‥と思いながら声をかける。

「大丈夫か！」

一瞬返事がなかったら‥‥という考えが頭を走った。

「はあ、大丈夫です！」

樺へ登りついた彼はどこも打っていなかった。わずかに血のにじんでいる彼の指を眺めながら、トップが落ちなくて良かったとしみじみ感じていた。

**君が代**

天狗の鼻で大声がわき起こった。雪上に何人かが一列に並んで君が代をどなっている。あれはうちの連中だ。天狗への尾根を今登り切ったに違いない。それにしても他所のテントの張ってある前で、よくまあ大声をあげたものだ。誰かが天狗のカクネ側の尾根が初登になるとデマをいいふらしたものだから、喜んで歌ってるに違いない。よその会の連中もさぞあきれていることだろう。

登ってもしんみりしていた過去の我々の年代と、現在の会員の層は大分変わってきた。君が代は時代ばなれしているが、人の前で大声でどなるのはいかにも現代らしい。

**与えられたもの**

空が曇りかけてからどれほど時間がたったのだろうか。見下ろす岩壁の前を白い点が浮遊していた。白い点はいくつも見つかり、みな動いていた。寒さに気がついて、白い点の意味がわかった。雪。そう降ることはあるまいと思うが雪は予想しなかった。ザイルは手持ちがなくなる程何回も延びた。しきりに降る雪の中で、ぬれたブッシュの急斜面は腕の力を最後まで使い切らせた。今日中に何とか直接尾根の合流点まで行きつきたい。視界

を失った我々は、上へ登るだけである。雪のリッジへ出たときはすでにうす暗く、そこから上へ延びるナイフリッジとその先に横たわる大きい茸雪が雪の白いベールを透かしてかすかに眺められた。すぐ右側にえぐれた急な漏斗状の雪田では、すでにサラサラと音を立てて雪が流れはじめていた。

合流点までたどりついて居たい。ふりしきる雪のナイフリッジを少し登ってみたが、今はもう合流点までの時間がないことが明らかになった。ビバークか。あれほど避けたいと思っていたのに今はあまり気にならない。引返してはい松の下の雪を少しふみ固めて二人立った。暗い空間が足元の雪を残してはるか下から上の方まで我々をとりまいている。このわづかの雪面が我々の休息の地か‥‥成ほど、罪深い我々にはふさわしい場所かも知れん。

**夜の意識**

プルージックをはい松にかけ、セルフビレー・ザック・ピッケルなどもろもろの物全てをカラビナで止める。ザイルを敷き込んで坐ると、ツエルトザックの中はやはり暖かだ。面倒なので思いあぐんだがついにアイゼンを外し、靴をぬぐ。ザックの物を背中の方へ積み上げて底からビバークザックを引張り出し、下村に借りた空気坐ぶとんを敷いて、カラビナで連いだザックの中へビバークザックを延ばして足から体を入れる。これで一息ついてやっと炊事だ。

インスタントのラーメンはうまくはないが、黴の餅やパンよりはいい。少し暖かくなり三好に時計を見ないことを言い渡す。ローソクを忘れたのが残念だが、ツエルトの天井が垂れ下がってくるので、あっても使えないかも知れない。トランシーバーで十八時の交信をする。AC・BCともよく入る。明日の予定、降雪が続けば北壁を止めて我々のサポートに廻って貰うよう平田に依頼する。

しかし考えてみるとオカシな話だ。壁にとじ込められながら指揮するなんていうのはどう考えても滑稽だ。浜コの声を聞くと気分が明るくなるのはどうしてだろう。我々を見守っているのは殺風景な野郎ばかりではないと感じるからだろうか。

壁をすでに抜けたことが気を楽にさせるが、まだこの上の茸雪が気にかかる。雪が少なくて相当痩せているから大したことはないだろうが、ずつと以前から考えていたキー・ポイントだ。何としても抜け出さねばならん。それにしてもあの悪いグサグサの垂壁に、荷宮と深見はよくハーケンを打ったものだ。彼等の試登の跡がなければ、我々はもっと困難をなめていたにちがいない。

寒くならない間にひと眠りすることにして、トランシーバーは一切かけないことにする。ただしAC・BCは一時間毎にスイッチを入れるとのこと。奥の手のカイロに火をつけて腰へ入れたので、あまり寒さを感じないが、うとうとするだけで眠ったような気がせず、意識がずっと続いているような感じだ。

気がつくと三好がガタガタ云っている。歯の根が合わないという表現そのままで、時々「寒い」とつぶやく。しばらくじっと聞いていたが、あまりガタガタ云うので気の毒になって「火をつけようか」と呼びかけた。電灯をつけると彼も起き上がり、ストーブに点火する。ツエルトの中は濡れて冷たいので雨衣を着てぬれるのを防ぐことにした。ツエルトの下や側面は一面の霜だ。

三好の方へツエルトが引張られて頭が真直ぐできず、首を曲げているものだから痛くて仕方がない。彼を見ると寝そべった形になっているので、

「そんな恰好では寒いの当たり前や、体を伸ばさずに丸くならんとあかんぞ。」

と云ったら、以後は膝を抱くような形をしていた。

夜中にココアを飲んだのかどうか、意識がモーローとしてよく覚えていない。三好のガタガタに何回か起こされて、ストーブに点火して暖かくなると彼はすぐコックリコックリやりだす。仕方なく火を消してまた意識のあるような、ないような状態にもどる。

コンチャンと直接尾根でビバークしたときは、寒くて眠れぬまま何かぼそぼそと話し合ったように思うが、今度は二人が入れかわり眠り込むので何も話すことがない。また話し込むほど、意識が深い所を見つめようともしていない。この相異は何だろう。十五もちがう二人の年令差、山に対する考えの違などが原因だろが、私自身も取付くまでの躊躇が消えてしまったこともあるだろう。

だが、私はいつまでもこんな登山をするわけにはいかん。子供を育て、家の問題を処理するために、私はどんなことがあっても安全でなければならない。たとえ死ななくても、怪我でもして一生満足な働きができなくなったら、子供と家の問題は破綻に近づくだろう。私にそれらの責任がかかっている限り、好んで危険に近づくことは避けなければならない。

このビバークは大して苦にならないが、危険性の多い登攀は考えものだ。人は皆賢明なのか、妻子ができると山から遠ざかるが、私だけいつまでもこんな登山をやっている。私が馬鹿げているのか、山から遠ざかる連中が情熱を失っているのか？　もし後者であったとしても、いつまでも山にかぢりついて遂に妻子を路頭に迷わすより賢明であるに違いない。

何回目かの三好のガタガタの後、窓から外をのぞいた彼は、

「空が少し明るなってきましたで。」

と云った。まだ早いと思って再び眠り込む。

次に目がさめたらツエルトの中は明るく、起きてもいい頃になっていた。一晩中痛い思いをした首を動かしながら朝食の用意をする。ベーコンだったか、ソーセージだったかをちぎってコッフェルに入れ、雪を溶かしてチキンラーメンをたく。

**俺達は小鳥だ**

やがてツエルトに薄日がさしはじめ、中に入っているのが窮屈なのでとうとうツエルトをめくって外気の中に体を曝した。

晴れわたった空が薄青色に広がり、山々にはすでに陽が当たっていた。足下は空間のはるか下にカクネの雪が横たわり、頭上は無限に遠い。壁の一角に体を空間にさらして、ちょっとした雪のテラスという巣に坐りこんだ。

ごま粒のようなACのテントに向かって、朝のヤッホッホーを送る。誰だかわからない人影がテントを出て、我々を探しているらしい。

二人の間に置いたストーブにかけたコッヘルから、湯気がヒラヒラと舞い上がって大空へ消えていく。空にかかった雪の椅子から足をぶらぶらさせながら、トランシーバーでのオシャベリをやめて、モーニング・カフィーをごっぽりと飲む。フランス風に「ベッドで飲む牛乳入りコーヒー」をやりたかったのに食料係め、ミルクをレーションに入れてやがらん。もっとも三好には関係のないことだ。

のんびりと小鳥を楽しんでいたら時間はどんどんすぎていった。上の茸雪が多少気にかかるので早く出かけねばならない。そこで又、何一つ落とさないためのカラビナのかけ換えや、いとも面倒で手がこんで窮屈な身支度がはじまる。

**茸**

再び紅白の水引をつけてナイフリッジの登攀がはじまった。左は中央ルンゼ側へストンと切れ、右は漏斗状雪渓へそぎ落されている。下で考えていたよりもシャープなリッジだが、刃は一尺位の厚みを持っているのでむづかしくはない。

気になる茸は漏斗状雪渓に垂れる如く横たわって、まだ何とも確信が得られない。適当なテラスが茸の直下にないので、少し手前で停まって三好を確保。そして彼をそのまま茸に向かわせる。二段に横たわる茸の一段目は心配なさそうだが、二段目へ移る箇所がよく見えない。

「ショックをかけんように、気をつけて行けよ。」

と、後から声をかけると、心配しながら茸をたどっている彼は急にへっぴり腰になった。

「行けそうです。」

三好が声をかけてくる。

「ここで確保します。」

と二段目に渡った所あたりで彼が立停ったので大丈夫かと心配したら、中央ルンゼ側の岩が出ているとのこと。へっぴりで彼の所まで登ってみると、茸は大きく漏斗状雪渓へ傾いていて、中央ルンゼ側のリッジの上部が露出していた。

二人でしばらく中央ルンゼのドンツマリを眺める。直接尾根側の壁は全体にハングしている感じ、ドンツマリも直接尾根で切れて登れそうにない。ルンゼはここで袋小路になっていて、僅かに正面尾根側のルンゼ本流の部分が、急傾斜の草付である。草付から何本もつららが下がっているところを見ると、登れるとはいいきれないような所だ。何処をルートに取るのだろうと二人で考える

が結論が出ない。（このときは三十八年三月にアッセント・クラブが中央ルンゼの積雪期初登をやったことを知らなかった。）

結論が出ないので前進することにした。茸の背を渡り、本来の直接尾根との分岐点へ着いた。以前にはここはテントでも張れそうな雪の尾根だったのに、向う側をのぞいたら痩せた雪稜に変わっていた。雪稜からふり返った茸のリッジが素晴らしい。北壁を背景にして、両側の切れ落ちた尾根とカクネ側へ急角度に曲り込んだナイフリッジ。逆光の中で確保している三好を入れて、カラーで何枚か写していたら、

「阿部さん、余分に写して僕にも一枚下さいよ。」

と三好。（カラーの現像ができて来たとき、なんでこんなに何枚も写したんやろ　と考えて彼の言葉を思い出した。）

**藪　　壁**

前に登ったときと比較にならないほど雪が少ないので、必ずしも以前のルート通りには登れない。思わぬ岩の段があったり垂直のブッシュが出て来たりする。コンチャンとツルベで登ったリッジはほとんど今はブッシュだ。ザイルが引掛って面倒なのと、たぐり寄せるのに腕力を消耗するので、遂にザイルを外してザックにつけてしまった。そのおかげで三好はザイルにブッシュが引かかっていかんとぼやいている。

急なはい松は全く雪のラッセルと同じ要領で泳ぐ。ただ違うのは、ブッシュの方がアイゼンに引掛って少しは頼りになることだ。

**真昼の音楽**

上をみてもまだまだ長い。青々としたブッシュの急なリッジが続いて　ブッシュを引掴むときに手袋と袖との間に露出した手首を枝でこするものだからヒリヒリと痛む。ビバーク食は、腹もちが悪いので早くも腹がへってへばり出す。暑くて汗が流れるので、私は汗止めに手拭いではち巻きをしてその上にヘルメをかぶっている。やや傾斜のゆるくなった岩を見つけて、二人並んで坐り込んでしまった。あと百米もなさそうだ。

頂上近くに人影が二人見える。サポート隊らしくもあるし、そうでないようにも見える。トランシーバーのアンテナを立てているので、こちらも出してスイッチを入れる。

「紫岳会、紫岳会、紫岳会」と呼んだら、見えている人影が応答した。

「そこにいるのは誰や！」

とどなる。我々がわからないらしい。

サポートが居ることに安心してザックからテルモスと食糧を引張り出す。晴れわたった空の中で、暖かい太陽を浴びながら達成されたも同様の目的をあとにして、ホット・レモンを飲みつつあたりを眺めまわすのは何と楽しいことだろう。ふと気がついてトランシーバーのラジオを入れる。何かふさわしい音楽はないか。やがて聞こえてきたのは懐かしい行進曲だ。題名は知らないがいつも聞くやつ。ソミ・ミファソミミド、ソミ・ミファミソソファ、二人で声を合わせてメロディーをどなる。

BCまでの苦しさなんか糞喰らえだ。墜落や雪で濡れたこと、ビバークであまり眠れなかったことなんかどうでもいい。北壁の頂上直下で太陽と雪と暖かさと満足感の中にひたって、私達は無上に楽しいのだ。ラジオの音楽とともに、心の中からいくらでも湧き出てくる喜びに、カクネや五竜、さらに毛勝や頸城の山々がことさら美しく感じられる。そして周囲の全てが、我々の喜びを受止めてくれるのだ。一生のうち何回もはないこの楽しさ。

私達はこの瞬間を、どんなにいとおしく思っただろう。

**頂上の想い**

再びはい松のリッジ。雪の斜面にブッシュを避け、頂上近くはいつもなら雪壁なのに、又はい松だ。私は立停って手で先へ行けと三好に伝える。二人にとってはどちらが先に頂上へ着こうと問題ではなかったが、はじめて北壁に記録を残す三好へのせめてものはなむけのつもりだった。

頂上には風があった。サポート隊の作ってくれたソー

ダー水が喉にしみわたる。無理矢理予定の時間に登りついたサポート隊は、我々が怠けていたために二時間も待たねばならなかったのに、無事登りついた事を一緒になって喜んでくれた。

頂上に坐り込んで私は考えていた。我々は初登攀をやったのではなさそうだ。従来のルートと、試登のルートとを、ほんの少し連いだにすぎないではないか。岩壁部の初登は荷宮と深見が終えている。ナイフリッジと茸雪は異常に少ない雪のためにこれという困難もなかった。あとはブッシュのリッジだ。我々の任務は試登のあとをつぎ足すにすぎなかったのだ。

取付いてから二十九時間目に抜け出た北壁は、前ほど私を苦しめなかった。コンチャンと登ったときは、岩壁部を登り切る所で左肩を脱臼するという故障があったためか、早く壁から抜け出たいという希いが強かったが、今度は三好の墜落も大事に至らず、雪には降られたけれど悪い条件ではなかった。雪が異常に少なかったために、快適な登りもなく、北峰へ登りついた時は、既に感激も百米下の休憩地に残してきたような感じだった。

我々のザックからもろもろの装備を引張り出して、サポート隊があたり一面に干してくれたが、適当に暖かくなったビバークザックの上に寝ころんで、私は五月の山上の怠情を楽しんでいた。

サポート隊は浜コを一人私の横に残して、今日蝶形左稜を登ってくる三人を迎えに行った。三好も一緒にのぞきに行ったのかあたりに見当たらなかった。浜コはあまり長い間待ったものだから寒くなって、三好のセーターを着込んで上場のケルンの横に黙って坐り込んでいる。私は仰向けに寝そべり、太陽がじりじりと顔を焦がしていくのを感じていた。

彼女は私が眠っていると思ったかどうか知らないが、目を覚ましていることを知っていたら、一言もしゃべらない私を、ずいぶん退屈な男だと思っただろう。しかし私にはそんなことはどうでも良かった。もう少しして左稜の連中がたどり着けば、我々の計画の第二段階は達成されたことになるし、私自身も無事に今こうやって頂上に居るのだ。

幸福とは、それに到達すべく苦しみ努力している過程の姿をふり返ったときの表現であって、到達した地点は気の抜けた真空地帯である、という私の持論からすれば、北峰上の私はまさに気の抜けた状態であった。

目標を達成してしまった現在、私の前には何もなかった。第三段階は、雨で予定が一日遅れとなったので、達成の見込みは五〇％しかなくなった。

目的のない人間は不幸である。そんなことを考えながら、底ぬけに碧い空を眺めていた。緑の風に吹かれながら、照りつける太陽の下で、怠情に身を埋めて、私はやがてプディングのような眠りに近づいて行った。

（「紫岳」第4巻 No.6（1963.9）　より）

## 阿部和行さんに教えてもらったこと

**吉見　孝（紫岳会）**

突然の訃報にただ言葉もなく右往左往の日々でしたが、今やっと阿部さんから学んだことなど思い返しています。

**未知の世界を求めて**

私が紫岳会の門を叩き、初めて阿部さんにお目にかかって50年近くになります。当時の会は、未知の山域、特に西ネパールの地図の空白部の研究で熱気にあふれ集会の度に普段物静かな阿部さんから未踏の地での登山をロマンたっぷりに聞かせていただきました。それが、私のヒマラヤ志向の原点だったと思います。

**山の彼方に**

そんなある日、「阿部さん何で山登るんですか」とのグモンに、「あのなー、山の向こうに何があるんやろと行って見たら、又その向こうに山が続いているやろ、そしたらあの山の向こはどないなっとるんやろかと、ムラムラと好奇心が湧いてくるねん」と…。私には解ったような？でしたが。

**自由な登山**

そして「登山はな、自分の山を見つめ、自分の山を伸ばすことだ。人の山に寄りかかっている間は本当の自分の登山でない。人間は本来孤独であるごとく、人それぞれの山を見つけるのが登山の姿だよ」と。そんな考えの中から、冬山行の偵察・荷揚げせず、全天候行動などを教えてもらいました。重箱のスミのようなブッシュ尾根

やモロモロの岩稜を登っては、初トレースだとはしゃいだことが昨日のことのように甦ります。

**そして亜流の山へ**

皆、歳をとってしまって夢がなくなってしまったのか、「いつの時代でも、ロマンを求める心を忘れないように」と。もしかしたら阿部さんとの最後の会話だったかもです。

偉大な大先輩の背中を追いかけて半世紀、結局追いつけないどころか、いろんなことを教えてもらいながらモノにならなくて本当にスミマセン。

私の人生も残り少なくなりましたが、阿部さんの教えを守り紫岳会の火を消すことのないように頑張りますので今後もよろしく私たちを見守ってください。

## 父・和行のこと

**小野葉子（次女）**

父・和行については、おそらく家族である私たちよりもこれをお読みになる皆様の方がよく理解しておられるのではないかと思います。

父は多趣味な人でしたので、いつも何かに没頭し、家でも常に忙しそうでした。登山などの出発前夜には嬉しそうに支度をして家を後にし、週末や連休・お盆やお正月に不在なのは当たり前でした。世の父親とはこんなものかと思って育ちましたが、よそのお宅はそうではないことが分かると「阿部山行」「雨風雪」「若おじさんは山に芝刈りに…」とあまりにも家にいない父のことを悪く思ったりもしたものです。

それでも年に何度か父が朝から家にいる日曜日は特別な気がしました。「兼高かおる世界の旅」を見て、一緒に作ったホットケーキを食べ、ゆっくり新聞を読んだ後「ルパン三世」（結構お気に入りでした）をテレビで鑑賞。大体これで午前中が終わり、昼からは思い出したように自転車で外出していました。

幼い頃、何度か父とカヌーやスキーに行きましたが、決して楽しいとは言えないものでした（笑）。敢えて何度も教えてはくれないし、どんな状況になろうとも助けてはくれなかったからです。特にスキーは悲惨でした。流れ留めが外れてスキー板は勝手に滑っていき、必死でヤブの中を探し歩いたことを思い出します。そんな時も父は遠くから静かにこちらを見ているだけ。口数の少ない父の印象的な姿に自然とこちらも泣き言を言えず、「何とかせねば！」ともがいて……なんとも会話のないサバイバルな親子の活動でした。

年月がたち、大人になってから父とスキーやパラグライダー、沢登りに行った時には（相変わらず会話が無いものの）有意義な時間を過ごすことができました。特に思い出深いのは、AJCSSのスキー大会に参加した時のことです。各地から集結した方たちは皆、負けず嫌いの猛者ばかりのようで、いざレースが始まるとそれまでの笑顔は消え（闘志むき出しの）本気モードでがんがん滑りまくる……その姿には圧倒されました。その晩の宴会での父の嬉しそうな顔、今でも忘れることのできない、そして決して家では見せることのない笑顔でした。

今なお父は「取り敢えずやってみろ」と私の背中を押し、行き詰まると「さて、どうする？」と語りかけます。常におもしろい目標を持ち、じっくりとそれを遂行していく人生の楽しみ方を教えてくれました。先日、父の墓参りの際に母が言った「パパ、天国で元気でね！」という言葉が胸に響きました。そうです、父は今なおきっと「なんぞ　おもろいこと」をやっているに違いありません。

皆様には、家族を代表して厚くお礼申し上げます。皆様がいたからこそ、父も様々な活動に励むことができたのだと思います。父の人生にお付き合いくださり本当にありがとうございました。

**阿部和行氏　略歴**

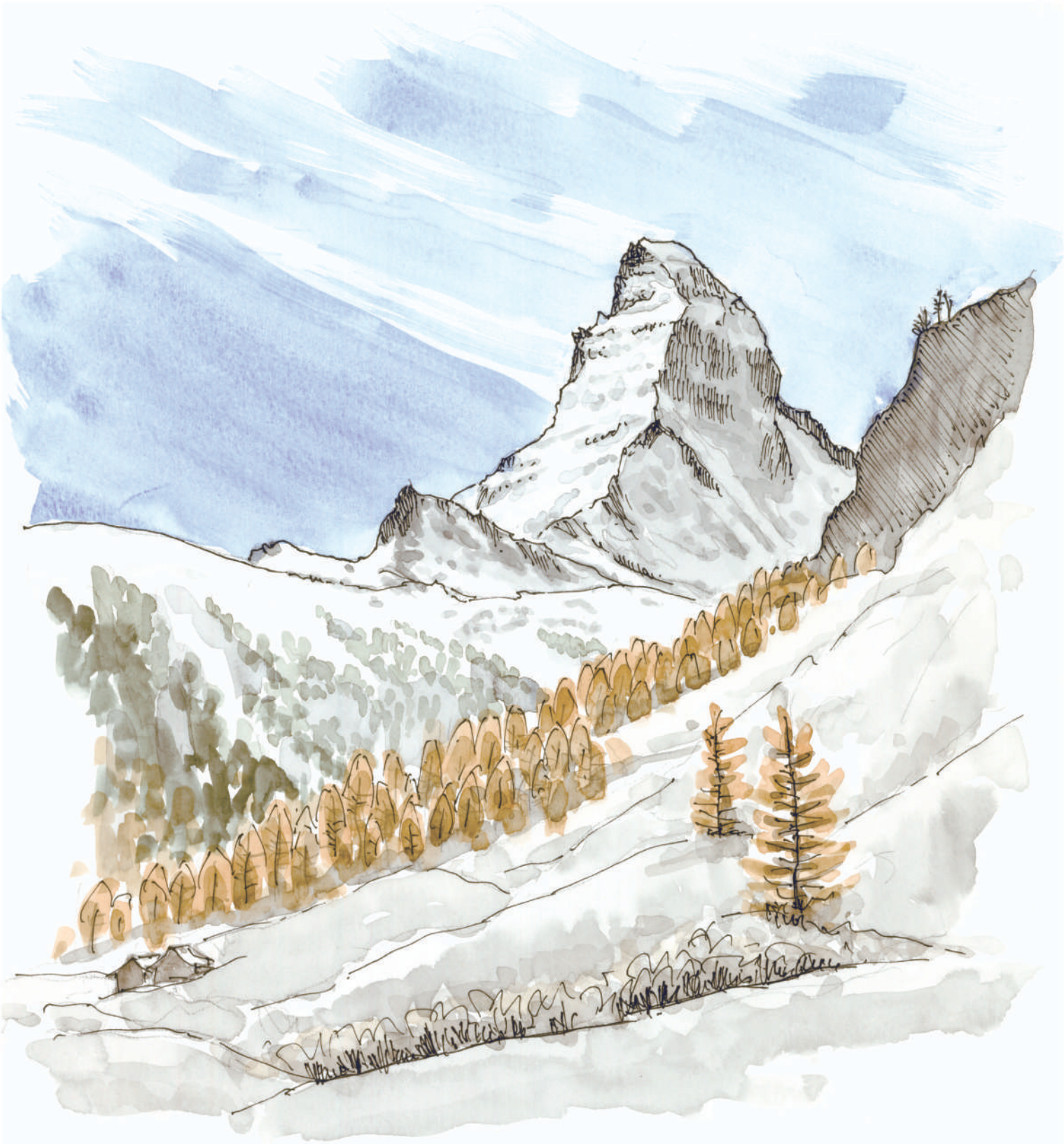
1926年（大正15）　神戸市に生まれる
1948年（昭和23）　愛媛農林専門学校（現愛媛大学農学部）卒業
1949年（昭和24）　大阪通商産業局に勤務しJIS、新技術開発の業務に携わる
1956年（昭和31）　鹿島槍北壁直接尾根積雪期初登攀
1957年（昭和32）　日本山岳会入会（会員番号4498）
紫岳会設立し、剣岳八ツ峰東面、爺ヶ岳東面の未開拓ルートを拓き、黒部奥鐘西壁紫岳会ルートなど開拓
1958年（昭和33）　第二次R･C･Cに参加
1960年（昭和35）　爺ヶ岳西俣奥壁初登攀
1963年（昭和38）　鹿島槍北壁・直接尾根左の稜登攀
「スーパーアルピニズム時代の用具の推移」（第2次R･C･C編『登攀者：積雪期登攀記録集』）発表
1967年（昭和42）　大阪通商産業局を退職、㈱田淵製作所（現㈱タブチ）に入社
1971年（昭和46）　大阪府山岳連盟西ネパール・カンジェロバ山群・ツェルポ・カン峰登山隊隊長
1976年（昭和51）　ランタン・ヒマールに入る
1986年（昭和61）　日本山岳会関西支部長（～2005）
1990年（平成 2）　皇太子殿下大峰登山に同行
1994年（平成 6）　ドナウ川自転車行１（シュヴァルツヴァルトからウィーン）
1995年（平成 7）　ドナウ川自転車行２（ウィーンからペーチ［モハーチ］）
1997年（平成 9）　中仙道自転車行
1998年（平成10）　アルプス・オートルート
ドイツ古城街道自転車行
1999年（平成11）　ライン川自転車行１（ブリガッハからエグリザウ）
2000年（平成12）　大阪山の会ヒマラヤ西ネパール登山に同行
2001年（平成13）　ライン川自転車行２（エギルザウからオランダ河口）
2003年（平成15）　四国愛媛県全域自転車行
「鹿島のヤマト山廻り役をめぐって」（『山岳』Vol.98）発表
2004年（平成16）　㈱タブチを退社
日本山岳会関西支部西チベット学術登山隊総隊長
2007年（平成19）　日本山岳会評議員・永年会員
2013年（平成25）　11月11日逝去

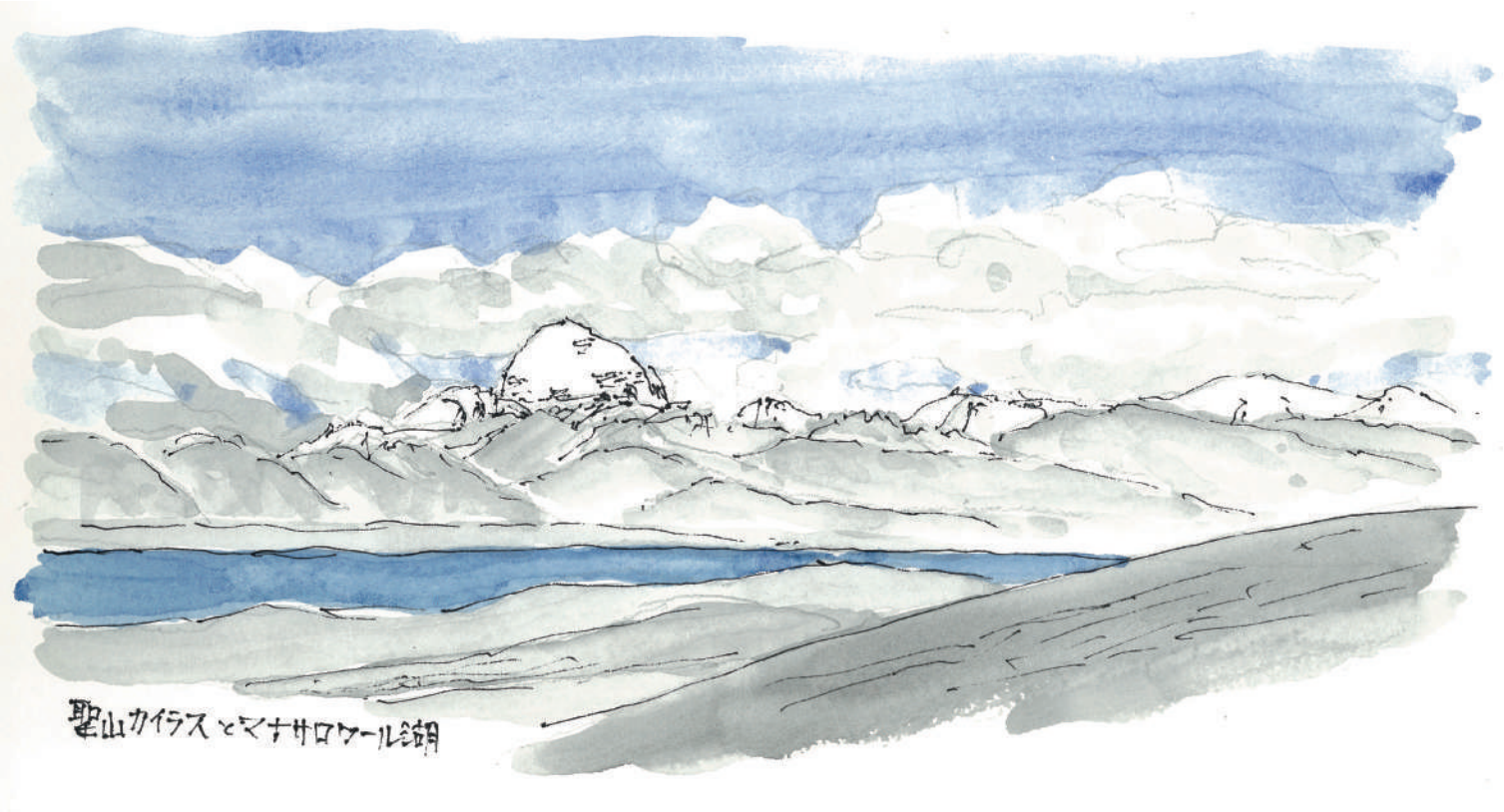
❋

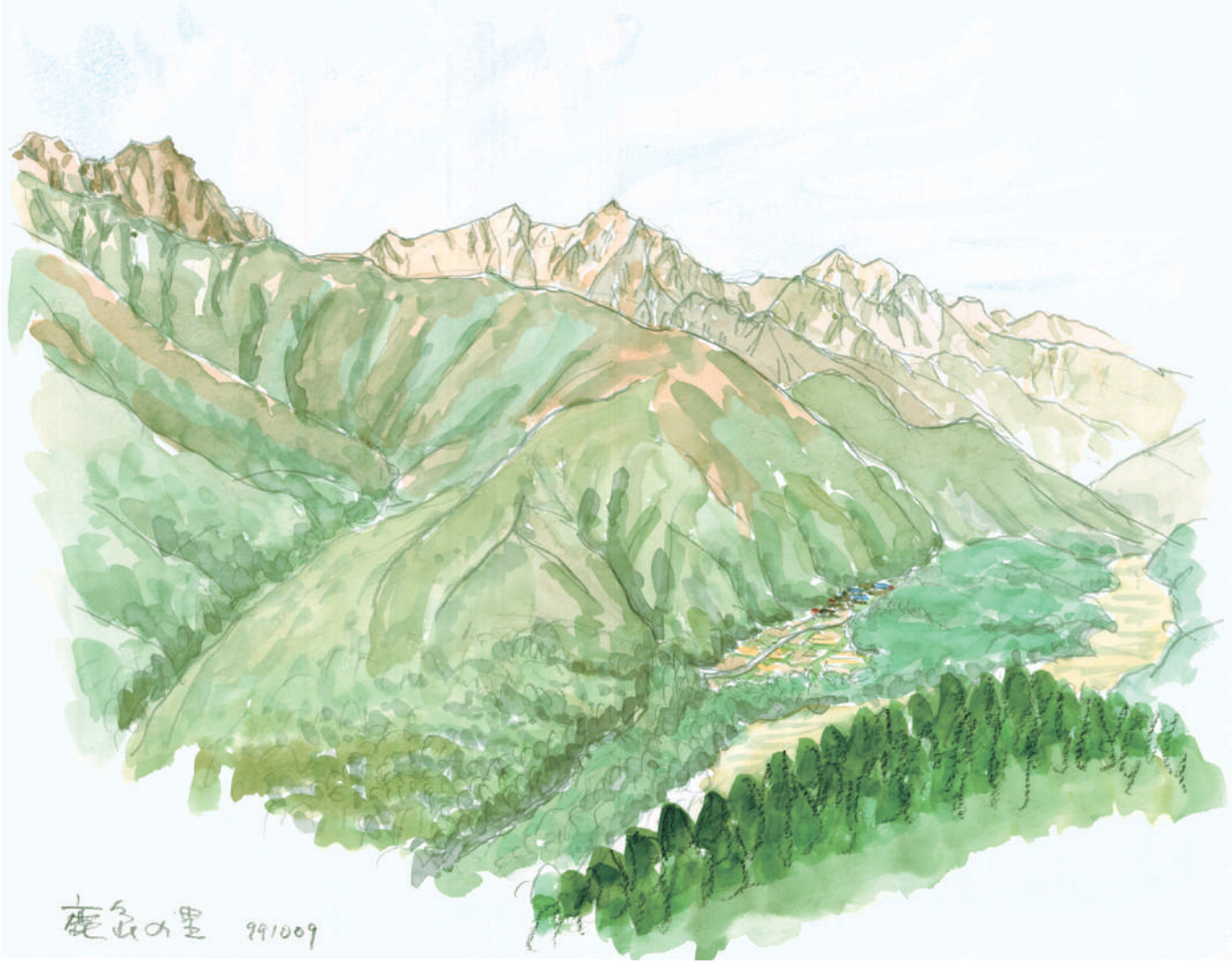
著書に東京中日新聞出版局刊『岩登り技術』（1964）、東京新聞出版局刊『新・岩登り技術』（1971）、水道産業新聞社刊『水と神話の国々：アジアの片隅からヨーロッパの街角まで蛇口の源流記』（1985）などがある。

〈編集後記〉
☆私がJACに入会した時の支部長は阿部さんだった。お名前は入会前から著書の『岩登り技術』で存じていたが、参加した新年会でお見かけしても恐れ多くてお話しなどできなかった。近年支部活動に参加するようになってからは、お目にかかることもなく、ご様子を噂で耳にするだけになってしまった。
☆一周忌に間に合うように追悼特別号を準備した。阿部さんの人となりを知るつけ、もっとお話ししておけば良かったと悔やまれてならない。（N）

発行日　2014（平成26）年11月11日
発行所　〒530-0015　大阪市北区中崎西1-4-22
梅田東ビル３階　304号室
公益社団法人 日本山岳会関西支部
e-mail: kansai.jac@canvas.ocn.ne.jp
郵便振替口座　00930-6-55950
発行者　重廣恒夫
編　集　加藤芳樹　野口恒雄　水谷　透
制　作　株式会社　双陽社
大阪市北区堂島2-2-28


Hier kam ich mal glaube, das ist die Symbol an Zermatt.


聖山カイラスとマナサロワール湖


991009